

仲間と楽しく農業を

小苗代

木戸場 清悦さん(73歳) 日向 啓子さん(71歳)
 大川原 幸子さん(69歳) 日向 キヨミさん(68歳)
 日向 テル子さん(66歳) 大川原アエ子さん(58歳)

経営面積 野沢菜30㎡(借地)

かからない野菜とのこと。今年には販売単価の高い秋口の出荷に合わせ、七月に二回に分けて種をまきました。
 「もうかるかどうかは分からないけど、ただいるよりはいいんだからということでは始めました。みんなでやり方を覚えれば、自分が抜けても大丈夫。若い人の手助けになればと思う」と木戸場さんはきつかけを話します。作業に出たときは、時間単位でつけておくことが小さなルール。一人ではできないことも共同だと仕事も軽減されます。仲間の集まる機会も増え、その分楽しさも増えています。



草取り作業もコミュニケーションの場

六人のグループが、今年から共同で野沢菜の作付けを始めました。「まだまだ働けるのに仕事がなくて困った」という散歩仲間との話の中から生まれた農業への試みです。五年ほど前まで野沢菜を出荷し、栽培のノウハウを持っていた木戸場さんがまとめ役となり、近所の遊休農地三十町を借り受けました。
 野沢菜は、町内の南信濃物(株)岩手工場との契約栽培。年二回収穫でき、あまり手の

今の環境を生かして

吉ヶ沢 滝澤 幹彦さん(28歳)

平成十六年に就農した滝澤幹彦さんは今、農業にやりがいを感じています。

以前から独立して何か事業を起こしたいという気持ちを抱いていたという滝澤さん。農業の選択は一昨年、母ユキ子さんの急逝がきっかけでした。「すぐ取り掛かれる環境がそこにあったから」と振り返ります。

本町には数少ない、専業の

耕種農家。借地を含む十三畝の畑一面に「春みどり」という品種のキャベツを植えています。毎日、二百五十ケース(十キ入り)以上の出荷と単価を取り決めた契約栽培で、父安藏さん(68歳)とともに、フリーピン人研修生一人を受け入れての作業です。

就農して二年。分からないことは農業改良普及センター職員などから、その都度指導

を受けているとのこと。手を掛けるほど良いものが出来上がることを実感しています。「天候などにも左右される難しいけれど、自分の考えで思いどおりにできるのが農業の魅力。今あるものを生かして自分がどれぐらいできるか挑戦してみたい」と農業への意欲は広がります。無理をせず、自然に続けられる状態がベストと堅実。何か新しいもの



のと今年「夏秋どりイチゴ」に取り組み始めました。赤く実ったイチゴが早く見たいと笑みがこぼれます。

のを今年「夏秋どりイチゴ」に取り組み始めました。赤く実ったイチゴが早く見たいと笑みがこぼれます。

経営面積

キャベツ13畝(うち借地4畝)、稲作15畝、イチゴハウス2棟(200平方㎡)

軽快にトラクターを乗りこなす滝澤さん



働ける幸せを実感

車門 村田タノさん(70歳)



市場の休みの日はゆったりとする村田さん

パソコンを使った農業簿記を習得した村田タノさん。

「できなくて当たり前」の精神で、町認定農業者協議会主催の講習会に二年間通いました。「皆さんのお陰でやっとここまでたどり着きました」と、パソコンでの記帳を基に青色申告をしています。

専業農家になったのは、村田さんが52歳の時。勤めていた縫製工場を辞め、五歳年上の夫保夫さんと一緒に六棟のビニールハウスで「雨よけハウスレンソウ」の栽培を始めました。徐々にハウスを増やし、平成十四年には十四棟を手掛けるようになりました。

「自分の手で育てるのは、楽しいですね。農業は自分の

経営面積

ハウスレンソウ ハウス14棟(1,584平方㎡)、アリウム(花)2畝

好きなように働けるから」と農業の良さを話します。

二年前、保夫さんが病に倒れたとき、これまで苦勞して築いたものを投げたくないと、思いから続けることにしました。何より健康第一。今年からは、少し体を楽にしようと近所の二人をパートで雇用しています。「人生、山あり谷ありですが、農業は定年がないから。年をとっても働けることの幸せを感じています」と明るく笑います。

「知らない人と話すのが楽しみ」という村田さん。新しい出会いと触れ合いを求め、さまざまな人との会話は勉強にもなることがいっぱいだと、チャレンジ精神旺盛です。

農業のカタチを見つけ出す

盛岡地方園芸産地拡大ビジョンの中で、本町の園芸振興の目標として掲げているのは「地域ぐるみ農業」の展開です。主業型農家、副業型農家、自給的農家が、それぞれの経営志向に応じて、お互いの利益を享受できるような集落営農です。農家の話し合いによって、地域の農地や労働力、機械施設などの利用調整を行い、農地の利用集積や農作業の受託・委託などにより主業型農家の経営基盤を充実させ、生産組織化や作付けの団地化、農産加工への取り組みなど、地域が一体となって取り組むものです。

多様化する消費者ニーズへの対応や収益性の高い農業経営、そして豊かな農村生活を実現するため、農業改良普及センターと連携しながら、生産技術の向上や地域の特性を生かした農産物の加工技術の開発、有利な流通展開に向けた戦略を確立させることが目標です。

また、産直や宅配による販売など流通の多様化に対応するため、ダイコンやハウレンソウ、キャベツなどを重点推進品目と定めて生産を拡大し、農家所得の向上を目指しています。

農業への参加は、農家ばかりではありません。農業の知識や経験がなくてもグループに加わることで、農業技術や経験が生かせることもあります。農業経営の第一線を退いても、取り組むことはできるのです。

耕地面積の少ない本町での農業の選択。恵まれた環境にあるとは言えなくても、この町に合った農業、自分が思い描く農業を見出す努力を続ければ、それぞれの生活スタイルに合わせた農業のカタチを見つけることができるのではないのでしょうか。